

施設だより愛の園

第22号
2017/7

「わたしはあなたの方のために立てている計画をよく知っているからだ。主の御告げ、それは災いではなくて、平安を与える計画であり、あなたの方に将来と希望を与えるためのものだ。」

(エレミヤ…二十九章十一節)



社会福祉法人 ぶどうの枝福祉会
愛の園 統括園長 信川恒夫

特別養護老人ホーム愛の園は定員七十二名(特養五十六名、ショートステイ十六名)の施設です。入所者の九割が女性で一割が男性で、圧倒的に女性の数が多いのが特徴です。そして、毎年十名程の方が施設を退所(死亡)されます。この六月にも一人の男性が、お亡くなりになり愛の園を退所されました。

彼は七人兄弟の次男として大阪で生まれ、腕の良い菓子職人として奥様と二人三脚で一生懸命働いてこられました。しかし、奥様が六十八歳で亡くなられてからは、心の拠りどころを無くされ、親戚を頼って、栃木県から神戸に引越してこられました。彼の口癖は、「妻が亡くなってからは、一つも良いことが無い。」でした。

彼には子供がいませんでしたが、夫婦安心して老後を過ごす事が出来る様に、儉約に



特別養護老人ホーム愛の園(全景)

努め、僅かばかりの貯えも出来ました。しかしながら、妻に先立たれたことで、彼にとつての苦悩の日々が始まったそうです。そのような時に、私どもが管理・運営するケアハウス松寿園に入所相談がありました。

彼は心の平安を無くしておられました。彼の口から出てくる言葉は、他人への愚痴や嫉み、「早く死にたい」、「一つも良いことが無い」でした。平成二十三年八月にケアハウスへの正式な入居が決まり、灘区の文化住宅を引き払い、引越してこられました。彼がケアハウスに入居してまもなく、私に直接話がしたいとの申し出がありました。私が彼のお部屋に伺いますと、笑顔で私に話しかけられました。

その内容は、①自分が亡くなった後、すべてを整理してほしいこと、②残された日々を安らかに過ごしたいこと、③自分の老後を託すことが出来る施設に入れたことへの感謝の言葉でした。そして、彼は自分が亡くなった後、全ての処置と手続きをお願いしたいとの申し入れでした。

このことを話している彼の顔は、何か吹っ切れたようですがすがしい顔をされていました。彼の口からも「ほっとして心が軽くなった。」と告白され、ケアハウスでの「昼の集い」にも積極的に参加されるようになりました。

その後、彼は認知症を発症されました。しかし、特養愛の園に移られた後も、愛の園の職員や後見人の方の献身的な介護や精神的な支えによって、穏やかに過ごされています。そして、彼は職員や周りの入居者の皆さんに愛され、この六月七日に地上での生涯を閉じられました。

主がエレミヤに語られた御言葉は、私たちの心に平安を与えます。彼も聖書の御言葉に触れ、愛の園での生活を通して、自分の人生は主の御手の中にあることを感じたのではないのでしょうか。私が聖書の話をさせて頂いている時の真剣な彼のまなざしが、今も懐かしく思い出されます。